

第4章 語とは：形態論（長野明子）

〈基本問題〉

1. (2a, b)は、日英語の例がまったく平行的になるように分析しているが、(2b)の内部の -o- は「連結母音」と呼ばれ、厳密には、これに対応する要素は(2a)にはない。-o- が morph- と -logy を連結する役割をする第3の要素であることは、本文にあるどのような現象からわかるだろうか。

（解答例） morphology における -o- が連結母音であることは、(4) と (5) の例からわかる。

-o- は morph- とも -logy とも独立した第3の要素であるからこそ、(4)のように -o- を伴わない形で自由形態素化する場合があるだけでなく、(5)のように -o- を伴った形で自由形態素化する場合があるのである。-o- を連結母音 (linking vowel) と言うのに対し、morph- や -logy は連結形 (combining form) と言う。

2. 「〇〇たたき」には、「百たたき」という例もある。これは『時代劇用語指南』のウェブサイト (<https://imidas.jp/jidaigeiki.html>) で、次のように解説されている語である。

8代将軍・吉宗の時代に、指切や耳鼻そぎの刑の代わりにもうけられた刑。用いるのは棒ではなく、竹片2本を革などで包み、その上を紙縊(こより)で巻いた笞(むち)である。軽敲き(けいたたき)は50回、重敲き(じゅうたたき)は100回敲く。敲く場所は牢屋の門前で、見せしめの意味があった。(以下省略)

この解説を参考にして、「百たたき」という複合語が、(7)とどのような点で異なるかを説明しなさい。

（解答例） (7)の「〇〇たたき」の場合、〇〇は「たたき」の基体動詞「たたく」の直接目的語に相当するのに対して、「百たたき」の「百」はその付加詞に相当する要素である。

「百」は、「たたく」に対して直接目的語ではなく、「百回」という回数を表す付加詞である。直接目的語と付加詞の違いについては、本書第5章を参照。『日本国語大辞典』には「棒たたき」という例もあり、これもやはり「付加詞+たたき」の型で、「棒」は「たたく」にとって道具に当たる。英語でも、本文で見た「直接目的語+動詞」型の例に加えて、handwriting (手書き)、ghostwriter (代作者) のような「付加詞+動詞」型の例がある。これらは本文2節で見た(9)や(10)と同じく、形態的には名詞+動詞+接尾辞という形をしているが、文法的には handwriting における hand は、動詞 write に対して「手で書く」という付加詞(道具)の役割をしている。同様に、ghostwriter における ghost も、動詞 write

に対して「あたかも幽霊のように」という付加詞（様態）の役割をしている。こうした英語の名詞＋動詞＋接尾辞型複合語の内部構造の違いは、名詞＋動詞という部分が独立して複合動詞になるかどうかという違いにつながっていることがわかっている。詳しくは Nagano (2008: Chapter 6) を参照。

解答上の注意点として、(7) は全体としてモノを表すのに対して「百たたき」は行為を表すといった解答では不十分である。なぜなら、「百たたき」と同様に、(7b-d) も複合語全体で行為を表すことができるからである（本文で述べたように、(7c, d) はモノとコトの両方の解釈をもつ）。つまり、解答では、「〇〇たたき」における「〇〇」が「たたき」に対して果たす文法的な役割（直接目的語であるかどうか）に言及する必要があるのである。

<発展問題>

1. OED には次のような語が載っている。

- (i) zonkey([名]zebra と donkey の交配種。zedonk の形もある)
- (ii) hangry([形]hungry で angry である)
- (iii) guesstimate([自動詞]guess して estimate する)

これらはカッコ内の 2 つの語彙素を合わせて作られた語だが、複合語とは呼ばれない。それはなぜだろうか。

(解答例) (i)-(iii) を複合語と言わないのは、作られる語の形が形態素＋形態素ではないからである。たとえば、zonkey において、zon や key は形態素ではない。また、hangry において、h-の部分は形態素ではない。

語形成には、入力語、操作、出力語という 3 つの要素が関与する（西山・長野 (2020)）。複合は、2 つの語彙素を入力として結合する操作であり、「形態素＋形態素」という形の語彙素を出力する。本文で見た複合語は、(2) や Dvandva を含め、すべてこの形をしている。一方、(i)-(iii) では、2 つの語彙素を結合した出力が、1 つの語彙素ではあっても、形態素の連結とは言えないものになっている。このような語形成操作を混成 (blending) と言い、複合と区別する。混成で作られる語は、混成語 (blend) と言う。混成語については、Bauer et al. (2013) で詳しく説明されている。

(i)-(iii) の混成語は、意味的に、本文 3 節で見た同格型等位複合語と似ているが、やはり区別を要する。なぜなら、たとえば(14) の名詞は「歌手で作詞作曲家であるもの」を指しているが、(i) の名詞が指すのは、「シマウマでロバであるもの」というより、シマウマでもロバでもない別の動物を指しているからである。

2. 英語には普通名詞ベースの Dvandva は少ないが、以下のような表現は豊富に存在する。

- (i) man-wife team
- (ii) mother-child relationship
- (iii) cost-benefit analysis

こうした表現の中のハイフンでつながれた部分を3節で見た Dvandva と比較し、似ている点と異なる点を答えなさい。

(解答例) (i)-(iii) のハイフンでつながれた部分は、3節で見た Dvandva と同じように、日本語にすると等位接続詞「ト」で言い換えることができる。しかし、(14) や (16) と違って単独で名詞として使うことはできず、名詞前位位置でしか使うことができない。

(i)-(iii) のハイフン部分は、基本的に名詞修飾要素としてしか使われない。つまり、英語で「A ト B」「A カ B」を等位接続詞なしの形にまとめることができるのは、team, relationship, analysis のようなある種の主要部名詞の支えがある場合に限られるのである。日本語でも、「姉妹」に関して似たことが観察できる。本文3節で見たように、Dvandva の「姉妹」は音読みで読まれる。一方、「姉妹の関係」のように名詞前位位置にくると、「あね・いもうと（の関係）」と訓読みもできるようになる（「・」はポーズを表す）。しかしながら、この「あね・いもうと」を「関係」という名詞の支えなしに単独で Dvandva 複合名詞として使うことはないだろう。

このような日英語の違いについて、詳しくは長野・島田（2017）を参照。